

令和4年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立創徳中学校

NO. 1

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	<p>1 わかる授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 年2回(11月・2月)に公開授業研究会の実施 校内授業公開週間(年に3回)の実施 教科部会での熟議・実践交流 <p>2 学習の定着</p> <ul style="list-style-type: none"> 定期テスト前の補充学習、長期休業中の学習支援 家庭学習の充実 各種学力調査の分析を行う <p>3 教科の特性に応じた表現力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 各指導單元の中に教科で求められている表現力を育成する学習課題の位置づけ <p>(成果と課題)</p> <p>1 年2回公開授業研究会、年3回校内授業公開週間が実施できた。5教科の教科部会を時間割の中に組み込み(3年目)、その月に話し合う事項を明確にし、つけたい力について、評価について、定期テスト等の生徒たちの強み、弱みを分析し、授業実践を交流しあうことができた。</p> <p>2 定期テスト前の補充学習を5回実施できた。特に、数学はたくさんの生徒が利用した。「LIFE(生活ノート)」を活用し、家庭学習の充実を図った。1人1台端末を使った家庭学習の課題の出し方を教科部会等で共有した。</p> <p>3 定期テストや日々の学習活動の中で、表現力を育成する問題や課題を設定し、子どもたちの状況を把握した。</p> <p>※「学校の先生は、自分たちにわかりやすく授業を工夫してくれる」と答えた生徒 R4 95.8%(R3 95.6%)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 公開授業の実施で多くの課題抽出ができ定期テストへの対策強化につながった。結果として生徒の信頼向上に寄与した。 生徒が主体的に取り組めるように細かい指導がなされ評価致します。解らないと諦めに繋がりがやめる気が出ません。この表現力の育成は子供の気持ちに寄り添って少しでも学力向上に繋がれば良いと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> LIFE(生活ノート)の見直しスケジュール管理を徹底し、日々の学習内容を振り返ることができるツールにする。 教科部会の充実 生徒が主体的に取り組むことができるような家庭学習の課題を吟味する。 「教科の特性に応じた表現力」の育成のための授業改善に取り組む。
ICTの活用	<p>1 日常的な端末の活用</p> <p>2 ICT支援員との連携</p> <p>3 研修会の実施</p> <p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒のICT機器の操作技能が向上した。 ICT支援員に助言を受けることで、教員のICT活用能力が向上した。 研修会で教員のICT活用の幅が広がった。 ICTを活用した授業により、生徒の興味関心を高めることができた。 ICTを活用することで、視覚支援をすることができた。 端末を用いた家庭学習の課題が不足していた。 生徒間のローマ字入力力量差を埋める手立てが技術の授業以外になかった。 情報モラルの指導の時間が十分にとることができなかった。 教科により、生徒にICTを活用させることが難しい教科があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 集中的な研修の実施でタイミングの良い機器の導入に合わせた操作レベルが向上した。生徒の前向きな考え方に沿う展開が得られた。 ICT支援員を通しての取り組みはとても良いと思います。これからの社会には絶対必要なのでぜひ頑張ってください。 	<ul style="list-style-type: none"> これからのネット社会を生きていく生徒に対して、総合や道徳の時間を活用し、情報モラル教育をどの学年も取り入れていく必要がある。 教員間でもICT機器の活用能力に差があり、どんどん新しいソフトが増えていくので、定期的に教員のICT活用を支援する場がある。 校区の小学校間でICT活用のスキルに差がないように、小学校との連携も今後はより密に行っていく必要がある。
不登校	<p>1 校内組織の充実、及び外部機関との連携を推進し、不登校生徒を減らす</p> <ul style="list-style-type: none"> サポート教室・通級教室・保健室との連携 市内不登校対応施設(けやき教室)・子家課との連携 小学校コーディネーターとの連携・情報交換 <p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 1・2学期は、昨年度の長欠調査の対象人数が減少した。 教育相談部会での情報共有、連携、具体的な支援方法などの検討を行うことができた。 学校全体で学年との情報共有を密にし、様々な関係機関と連携しながら、支援方法を検討した。また学年会で検討された課題を、さらに教育相談部会で協議をし、通級教室や保健室、SGと連携しながら、適切な支援につなげた。 生徒の困り感に寄り添いながら、支援をすることに努めた。 今年度は、家庭訪問シートを活用し、情報共有することができた。 校区小学校のコーディネーター、不登校対策担当者との連絡を密にし、連携・情報交換を行い、生徒支援に活かしていくことができた。 <p>※「クラスでは、安心して学ぶことができる」と答えた生徒 R4 93.2%(R3 91.7%)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 入学前の小学校との情報共有で効果的なサポートの道筋が明確になった。今年のサポートのあり方を他部門との共生で考えたい。 地道な取り組みがなされて学校の先生方の努力本当に感謝致します。コロナウィルスの中での難しい環境ですが継続して頑張ってください。 	<ul style="list-style-type: none"> 新たな不登校生徒を生まない取組、未然防止の手立て(レジリエンス教育など)をより一層とる必要がある。 不登校生徒や保護者への支援や手立てをさらに早期に対応していく必要がある。 各学年で欠席状況の確実な把握と情報共有を常に行い、幼小中が連携して欠席がちな生徒の家庭状況等を把握し、早期発見・早期対応が必要である。

<p style="text-align: center;">地域連携</p>	<p>1 学校だよりの発行 2 学校ホームページの更新 3 近隣校との連携(出前授業, 交流授業, 授業参観) 4 学校運営協議会での熟議と具体的取り組みの実施</p> <p>(成果と課題) 1 年間20回以上学校だよりの発行をすることができた。 2 学校ホームページの更新を定期的に行うことができた。 3 近隣校と連携(英語科による小中連携授業、小学校での出前授業、飯野高校授業参観、NOメディア週間の実施)することができた。 4 学校運営協議会で熟議されたことは、職員で共有し学校経営の改善に努めた。</p> <p>※「学校は、通信、ホームページ、メール配信などで、情報を家庭へ積極的に提供している」と答えた保護者 R4 81.9%</p>	<p>・学校だよりの充実により、よりよい学校の思いを伝えるツールになった。学校として校長としての思いが伝わって良い。</p> <p>・中学通信は地域の方々に学校の活動が認識され理解されています。合唱ブラスバンドは牧田地区の行事に参加していただき高齢者は懐かしく幼児は憧れの姉のように感じており地域の交流に重要な役割をさせていただきました。</p>	<p>・ホームページの定期的な更新、学校だよりの地域への回覧等を通して学校の情報を公開し、引続き地域に開かれた学校づくりに努めていきたい。</p> <p>・コロナの感染防止対策とともにICTを活用するなどして、子どもの様子を見る機会を増やしていきたい。</p>
<p style="text-align: center;">特別支援教育</p>	<p>1 特別な支援を有する生徒の理解に努め、支援を実施していく ・学年会議及び職員会議、特別支援教育相談部会等で情報を共有する。 ・支援方法を検討し、必要に応じてケース会議を行う。 ・支援ファイルの作成、定期的な見直し等、情報整理をする。</p> <p>2 特別な支援を有する生徒理解のための研修を実施する。 ・校内研修及び職員会議で、個々の実践事例を挙げ、特別な支援を有する生徒を理解するための、研修を行う。 ・校外での研修へ積極的に参加し、内容の還元を努める。</p> <p>(成果と課題) 1 支援の必要な生徒に対して、担任、養護教諭、通級担当、学年の教師と複数で関わり続けることができた。支援方法についても教師同士が検討しながら対応できたケースが、昨年度より増えた。さらに生徒が何に困っているか、悩んでいるかを見抜く教師の力量を上げること、担任一人では抱えきれない問題に対して、同僚を信頼し、協力を求めていけるということができていけるとよい。特別支援学級籍の生徒に対して通級担当がSSTを行った。それにより生徒同士の会話が広がった。特別支援学級籍の生徒の中には、落ち着いて学べるようになり成長を感じる生徒もいる。</p> <p>2 「支援の必要な生徒にどう関わるか」というテーマで特別支援の研修を2回持った。本校生徒の事例を4例検討したことは、身近な生徒であり、支援について深く理解することができた。また教師の連携の大切さについても、学ぶことができた。校外の研修としては、飯野高校定時制の授業参観に多くの職員が参加し、本校卒業生が意欲的に学び頑張っている姿から、支援についての多くの学びを得ることができた。</p> <p>※「困ったことがあれば、学校の先生に相談できる」と答えた生徒 R4 81.3%(R3 78.8%)</p>	<p>・時代背景として今年受け入れる生徒が見込まれ対応する教師の充実が必要になる。個人別の支援ファイルなど有効なツールになった。</p> <p>・先生方の努力、支援等素晴らしい取り組みとなっていて安心致します。</p> <p>・協議会でもお話をいただいたので、理解できたように思います。</p>	<p>・生徒の置かれた状況、背景を考えながら生徒の困り感に気づき、情報を集め、早い段階で確かな具体的な支援をしていけるようになる必要がある。</p> <p>・担任一人が抱え込むのではなく、複数での確実な支援を広げていく。そのためには教師の支援に対する力量を更に上げていく必要がある。</p> <p>・他の分掌と丁寧に関わり続ける継続した支援が必要である。日常の関わりの中で、教師が安定した大人のモデルとして、安心感を与え続けていける存在となっていきたいと考える。</p>
<p style="text-align: center;">生徒指導</p>	<p>1 生活規律と授業規律を重視し、安全安心に学校生活を送れる生徒指導の推進。 ・職員間での定期的な情報交換と学校で統一した指導の徹底。特別支援の視点を意識した生徒対応。 ・生徒会、室長会、各委員会と連携した朝の挨拶運動や交通安全運動など教師・生徒の連携した取り組み。 ・生徒会と連携した校則についての意識調査 ・交通委員会と連携した「おはよう、おかえりパトロール」の定期的な実施。 ・5分前入室・2分前着席の定着と徹底。</p> <p>2 保護者・地域・関係機関との連携強化。 ・ハンター等大型ショッピングセンターやゲームセンターへのテスト期間等の巡回指導。 ・地区補導での情報交換と共有、巡回指導。 ・小中で連携した生活指導、生徒指導の流れの共有。 ・鈴鹿警察署、平田交番など地域警察所との情報共有と連携の強化。</p> <p>(成果と課題) 1 全体的に落ち着いている。生徒会と連携し、校則についての意識調査をすることでルールの再確認や校則の意義について考える機会となった。また、いじめ防止の缶バッジの作成にも生徒会が中心となって取り組み、全校生徒がカバンにつけることで生徒主体でいじめ防止に取り組むことができた。物の破損やいたずらがたびたび起こったので、業間の巡視や生徒の規範意識をより一層高めていく必要があると思われる。生徒指導部会での情報交換や決定事項を翌日の学年会で周知・共有することで、学校の現状把握や統一した指導の徹底を行うことができた。</p> <p>2 地域の方や小学校との情報交換、生活指導の交流、危険個所の確認は、中学校とは違った視点の意見が聞けたり繋がりができたりするので大切だと実感した。これから入学する生徒が、有意義な中学校生活になるように連携をより強化していきたい。機関との連携も概ねできたが、地域警察署との連携は必要最低限であったため、今後は連携を密に取っていきたい。</p> <p>※「学校の規則を守っている」と答えた生徒 R4 96.9%(R3 96.9%)</p>	<p>・ここ数年間の生徒の動きはとて落ち着き地元での安心感の基になっている。このまま安定した運営を続けてください。</p> <p>・学校の先生方の努力による指導は将来地域社会の一員としての自覚づくりに役立つと思います。</p> <p>・協議会で具体的事例等を説明していただき理解を深めるべきだと思います。</p>	<p>・生徒一人一人の規範意識を高めていくため、些細な出来事にもきちんと対応し、日ごろから教師が危機意識を持つことや同じ方向性で指導できるように情報交換や意見交流を行っていく。</p> <p>・SNSトラブルが毎年起きるので、学活・道徳・総合の時間や学級での時間、講演会等でスマホやクロームブックの使い方についての指導を徹底していきたい。また、いじめやトラブルにならないように教師のアンテナを高くしていく必要がある。</p> <p>・校則を見直していくに当たって、生徒に校則の意義を再度確認させるとともに、教師間でも共通認識を持って指導していく必要がある。</p>